

## 朝日新聞書評の内幕

私は、朝日新聞の書評を、一九九六年四月から、一九九八年三月まで、二年間にわたって担当していた。朝日新聞の書評というと、新聞書評のなかでも、もっとも本の売り上げに貢献するらしい。それだけではなくて、業界関係者がたくさん見ているので、朝日の書評に載ってたかどうかというのは、けっこうあちこちで話題になったりするのだ。ところが、その朝日の書評というのが、いったいどういふふうに行なわれているのかについては、謎とされていた。どうやって、本を決めるのか。書評する人をどうやって選ぶのか。何か、裏取引があるのではないか。それらの疑問は、出版社の編集者ですら答えられないと言う。

よし、それなら、私が、朝日書評の裏側を暴露してやろう。というわけで、私が知り得るかぎりにおいて、その内幕を書いていくことにする。以下に記述されるのは、九六年から九八年にかけての実態であり、その後、同じようなことが続いているのかどうかについては、私は知らない。

まず、なぜ私が書評委員に選ばれたのかということを書いておかなばならない。と言いつつ、実は、なぜ選ばれたのかについて、私はまったく何も知らないのである。九六年と言えば、私が『宗教なき時代を生きるために』を出版した年だ。その前年に、オウムをテーマにした私へのインタビューが、朝日新聞に掲載されている。その前後に、「これから書く本」についての私のエッセイが、朝日新聞書評欄に掲載されている。たぶん、そ

のときの編集者が、私のことを候補としてノミネートしたのだろう。おそらく、私がそれまで書いた書評の文章なども、チェックしたにちがいない。

というわけで、ある日突然、朝日新聞の知り合いの編集者（記者）から電話がかかってきたのだ。それで、書評委員を引き受けてくれないかと依頼されたのであった。さすがに、これには驚いた。だって、あの、朝日の書評委員でしょう。俺なんかでいいの？って感じ。私は、当時、まだ駆け出しの書き手だったし、そんな偉い人がいっぱいいるところになんか呼ばれて、やっていけるんだらうかと正直思った。と同時に、へー、面白そうじゃんとも思った。なぜなら、私がいた国際日本文化研究センターには、朝日の書評委員をしたことのあるスタッフが何人かいたからだ。たとえば、一時期、面白い書評を連発していた井上章一、私のボスであった山折哲雄、伊東俊太郎らである。彼らから、朝日の書評委員のことについて断片的に話を聞いていたので、興味津々だったのだ。

というわけで、なぜ俺なのかという点はまったく説明されないうまま、調子よく依頼を引き受けてしまったのでありました。それから、担当編集者にいろいろ話を聞いたのだが、どうも、月に二回、東京の朝日新聞本社に出かけていって、書評する本を選んでこなくてはならない。それで、ノルマは、三週に一本。京都から東京までの旅費は朝日新聞が出す。ふむふむ。書評の原稿料は、一本五万円。ぎょっ、こ、五万円？ これには驚いた。

たったの二〇〇字くらいで、五万円かよ。こりゃ、すごいや。なんか大人の世界だなあ、という印象。ところが、それで驚いてはいけないのだった。本について調査したり、書評について考えたりする時間代として、月に五万円差し上げますと来た。な、なに？ 考えるだけで五万円か。すかさず聞いた「もし一本も書評書けなくても、もらえるんですか？」。すると、そうですとの答え。いやー、さすが天下の朝日新聞、やる事がでかい。もし仮に、書評をまったく書かなかったとしても、月々五万円ずつ、二年間にわたって振り込んでくれるってことだ。なんか、援助交際やってみたいたなあ。それも、かなりえぐいやつ。

ちよつと後ろめたさを感じながらも、その条件で引き受けた。そしたら、さつそく四月の分の書評を書いてもらいたい。だが、今回は時間がないので、書店で適当なのを選んで書評して送ってくれ、と言われた。そこで、さつそく本屋さんに行つて、『生殖革命と人権』を買つて、書評して送つた。編集者は、これでよいと言ってくれた。これが、記念すべき、書評第一号となつたわけだ。

そうこうするうちに、第一回の書評委員会が開催されることになった。私は、さつそく新幹線で東京に行つて、築地にある朝日新聞本社新館にある会場へと向かった。新聞社というのは、なかなか警備がきびしい。まず新館の1Fのところ、受付の人に行き先を告げないといけない。書評委員会に出るのだと言うと、カウンターから書評委員のバッジを出してくれた。これを付けていると怪しまれないらしい。エレベーターで上の方の階まで行く。会場に着いてみると、朝日新聞の編集者・記者さんたちが、多数待機していた。顔見知りの担当編集者もいる。ということ、日本社会ではお決まりの名刺交換。それが終わったところで、さつそく、新刊を

見て選んでくださいということになった。

ここで、仕組みの解説。新刊が出ると、各出版社は、朝日新聞の書評担当に送る。編集者たちが手分けして、まず一次審査をする。どうも、この一次審査で、かなりの本がふるい落とされるらしい。あとで分かっていたのだが、この振り分けには、編集者たちの嗜好がかなり反映されているらしい。出版社が強力にプッシュする本は、けっこう入ってきているところを見ると、話題書籍は取り上げたいという新聞側の意向もほの見える。そのほか、この一次審査には、いろんなことがあるのだからということ、が、ずいぶんあとになって、分かってきた。でもまあ、一次審査では、残るべき本は残っているというのが正直な感想だ。くだらない本や、極端な専門書ははずされる。マンガや児童書も、基本的にははずされている。本の好きな人が手に取るかもしれない、というたぐいのものが、基本的には選ばれている。あと、書評委員の書いた本も、原則としてははずされる。この一次審査は、月に二回行なわれる。それを通過するのは、百冊強である。

あと、実は、書評委員には、本を推薦する権利が与えられている。つまり、あらかじめ、この本は入れておいてくださいねと言っておけば、自動的に一次審査にはパスしてしまうのだ。これは一種の抜け道である。これを使えば、自分が書評したい本は、かなりの確率で書評できるということになる。私も、この仕組みを大活用した。一次審査を通過しないかもしれない地味な本は、あらかじめ推薦しておいた。でもまあ、実際には、私が推薦しないと上がってこないような本は、あんまりなかったのだけれど。しかし、たとえば『女性と出生前検査』というような本は、推薦がないと却下されていたとは思う。この抜け道は諸刃の剣だ。うまく利用されれば、良書を効率よく発見できるツールになるが、悪用すれば、書評委員のコネ